

Vol.5 オットー・ワグナーの「近代」を郵便貯金局に追う

三谷 克人 (建築家、ウィーン在住)



三谷 克人 (みたに・かつひと)

1950年大阪府生まれ。1975年京都大学建築学科卒業。1979年渡米。ウィーン工大在籍のかたわら設計事務所勤務。1992年コンペ等入選を機に独立。以降「TRANSPOLIS」を主宰、現地の建築家の職能を遂行中。日本での客員講演多数。オーストリア建築家中央連合会会員。

近代を模索する建築の系譜

1826年にマンチェスターを訪れ、おびただしい工場の集積に脅威を感じるも、感嘆を隠せなかったK. F. シンケル。1851年のロンドン博覧会で、生産手段の変遷に、建築の危機を見抜いたゼムパー。そして1895年、跋扈しはじめた「技術美」に手をこまねる重鎮たちを尻目に、オットー・ワグナー (1841-1918) が「新時代の建築 (moderne Architektur)」を発表する。この三者を系列化し、ひとつのシナリオとして語ることは肯ける。

「…< 芸術は必要にのみ従う。> この真実に我々を気付かせてくれたのは、他でもない、あのゼムパーだった。我々が歩むべき道を、明瞭に示してくれたのだ。…」、53歳でウィーン・アカデミーの教授に就任したワグナーの、講演の一部だ。

建築術を近代に救おうとしたゼムパー。その論のペクトルを反転させて、近代を前面に据え、自らの建築をもって、新しい時代の建築術をマニフェストする、ワグナーの、そういう意志と覚悟の表明だった。

19世紀人の関心事たる近代

19世紀のウィーンの建築家、ファン・デル・ニュル。オペラ座の設計者だが、それが不評で世論に叩かれ、自殺を遂げた人ということで、ご存知かもしれない。その彼は、ウィーン・アカデミーの装飾論の教授で、ワグナーの恩師でもあった。新しい構造と造形をテーマに、次のようにコメントしている。< 合理的で新しい建築表現に到達すること、それが目標だが、距離は計り知れない。> 1845年のことだった。様式の真っ只中に身を置きながら、装飾の細部を論じるのではなく、構造と造形の整合性を求める—教授の、知的でクールな姿勢!

ファン・デル・ニュルが先達として若きワグナーに、その「距離」について説いたであろうこと、疑いはない。学生時代には、ウィーンにいたゼムパーに、注目したはずだ。留

学先のベルリン建築アカデミーでは、シンケルの建築作法を体得しただろう。跡継ぎとして登場する用意は、できていた。

ワグナーのミッシング・リンク

ワグナーが実務に就いた当時のウィーンは、リンク通りが完成して空前の建設ブーム。彼も若くして、賃貸シアパートに関わり始める。同時に、ヨーロッパの大コンペにも次々と参加した。そして1884年「アムステルダムの証券取引所のコンペ」で、様式の脱皮を試みるオランダ人ベルラーへの案が、勝利した。これがワグナーの、転機ではなかったか。様式で入選を繰り返してはいるが、時代の趨勢は明らかだ。しかもベルラーへは、チューリッヒでゼムパーの論を学んだ。ゼムパーの作品様式はチェックしていたが、様式「論」は論に止めていた。

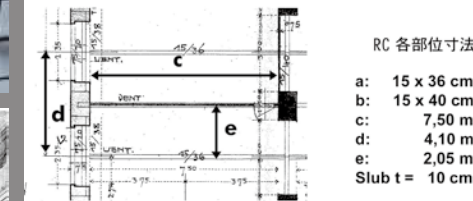
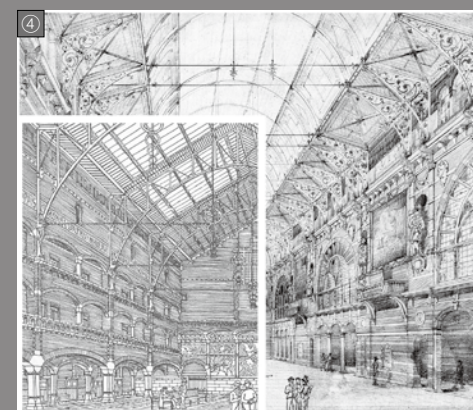
様式を借りた賃貸住宅に、建築的着想を次々と試し、自らのポテンシャルを高める作業。そういうワグナーが母の死を機に、因習を捨てて自らを正し、1884年に人生の舵を切り直した。その新たな息吹きが、ワグナーの時代への意識を高め、「ゼムパー的なもの」に目覚めさせたのかもしれない。そして10年、近代建築に身を呈すことを決心したのは、近代と対峙するという伝統に育まれた者としての、使命感ではなかったか。

オットー・ワグナーを「近代建築の父」と称するためには、その19世紀的部分も、正確にトレースしなければならない。

「近代建築」、実現への賭け

ワグナーの公共建築設計のキャリアは、膨張するウィーンの新しいインフラのデザインを任された、1894年に始まる。シュタットバールの駅舎や陸橋などの施設で、近代の技術に新しい表現を与え、彼の建築界における評価が高まった。

だが、その近代を謳う作風を、エスタブリッシュメントが毛嫌いする。とりわけ皇太子



③「郵便貯金局」ホール、柱見上げ
④アムステルダム「証券取引所」ホール・パース H.P.ベルラーへ、コンペ提出案 (大、1885) から実施案 (小、1898) に至る変遷に注目!
⑤「郵便貯金局」ホール、空調吸気口の職人技
⑥「郵便貯金局」オフィス棟 鉄筋コンクリート床版、テータ
⑦「郵便貯金局」ホール、柱の躯体
⑧中庭大屋根スケッチ、ホール外屋根の補修不可能
⑨「郵便貯金局」上部ファサードの大理石版破損例
出典: ③⑤筆者撮影 ④ウィキメディア・コモンズ ⑥BAWAG-PSK銀行、筆者加筆 ⑦⑧⑨HOPPE Architekten

Thanks to HOPPE Architekten for providing documents of the renovation.

のフェルディナンドはアンチ・ワグナー、その横槍でコンペの入賞を逃がしたりした。いくら近代建築を推奨しても、誰もが体験できる、公共建築として実現しなければ、波及効果は望めない。

そういうワグナーに1903年、機会が巡ってくる。郵便局の銀行業務を統括する、『郵便貯金局』の設計競技だ。複雑に交錯する機能に最適解を求める要綱。賭けをするチャンスだった。与条件が綿密に分析され、全体の改善に供する場合は、機能の再編成を提案することも、厭わなかった。顧客の利便と安全管理の向上を目指して、全ての窓口に大きなホールに集められ、床をガラスブロックとしたその下に、均質な自然採光の備わった伝票整理の広間が配された。ホールの天井にガラスを張るという意匠を、実利的に裏付ける、気の利いた発案でもある。

当然のことながら、ワグナーの案は物議を醸したが、審査委員たちも本気だった。予定を二日延長して審議した結果、提案のメリットが認定され、一位案に選ばれた。素人の

横槍も、今回は功を奏さなかった。

先年のリノベ資料の提供を受けたので、興味深いディテールを、いくつかご紹介しよう。

『郵便貯金局』、現状と分析

< 鉄筋コンクリートの床版 >

近代工法たるRCを床に導入、床厚の削減を図った (高さ制限の下、必要床面積を確保するため)。梁とスラブを平面的に標準化し、配筋のプレファブ化を可能とする (工期の短縮)。RC素材の投入効率化を目指して (ワグナー的「近代」モラル)、各部の寸法を決定。スラブ厚は1センチ刻みに設定。不陸を均す工程を省いて、アスファルトを厚めに敷き、じかに無垢のオーク材を寄木に貼り込んだ。

< 中央ホール >

柱の「躯体」は、鑄鉄プロフィールを縦方向に並べて平鋼で一体化し、モルタルで薄く覆ったもの。それに下地として山形鋼を取り付け、アルミ板を固定。下地は水気 (結露)

で部分的に腐食。上階から化粧ガラスの天井裏へアクセス可。影を考慮して歩行橋の平型鋼のピッチを50cmとし、スキー状の板を装着した作業員がメンテする (とコンペの解説書にある)。文化局の意向に合う、外側の屋根の修復は不可能で、ワグナーのコンペの提案に習って、中庭全体が新しい屋根で覆われた。

< 石板被覆とボルト >

ファサードの鋳に託された役割は、被覆のマニフェスト。ファサード上部の大理石板は厚さが2cm、裏全体にモルタルが施工され、φ2cm、長さ12cmの鑄鉄の鋳 (+アルミ・キャップ) で留められていた。熱膨張による石板の割れ方から、金物の有効性が判明するが、「鋳だ、モルタルだ」という論争は、「装飾」を論じる研究者たちの、人工的で無用な議論だ。我々実務家は、両者が協力して石張りを今日まで伝えてくれたこと、そしてゼムパーの論の、応用と展開が読み取れることに、感謝しよう。

(続く)



①「郵便貯金局」確認申請断面図部分、1904年
②「郵便貯金局」中央ホール
出典: ①BAWAG-PSK銀行 ②筆者撮影